

# JAIR NEWSLETTER

## 日本国際政治学会

No. 11

April 1980

### ある友人のこと

藤井 昇 三 (電気通信大学)

国際政治学会創立後最初の研究大会は、1957年5月竣工したばかりの明大大学院校舎で開催された。大学院学生であった私は、この時以来、新生の国際政治学会の百家争鳴の自由闊達な雰囲気になれ、研究大会や、現在の研究分科会に当る東京・国際政治研究会（会場は法大田中研究室）、日本外交史研究会（会場は外務省外交文書室）に、他のどの学会よりも熱心に出席するようになった。

国際政治学会の24年間の歴史の中で、私にとって最も深刻な衝撃として忘れることができない事件は、学会会員であり学友でもあった金圭南氏が逮捕、処刑されたことである。

東京・国際政治研究会や日本外交史研究会で研究報告を行ったことのある金圭南氏については、ニューズ・レター第8号で、関寛治教授が痛恨の想いを込めて、すでに言及されている。私は大学院時代に金氏と共に学んだ友人の一人として、本学会で金氏について知る所の少ない新しい会員が殖えた現在、今一度金圭南氏事件をふり返って見たいと思う。1929年韓国全羅南道鳥城で生まれた金氏は、51年来日し、立命館大学卒業後、明大大学院（修士課程）、東大大学院（博士課程）で学び、研究テーマは「朝鮮の独立と国連——特に平和的再統一の可能性に関して」であった。分断国家朝鮮の平和的統一を念願する金氏は、一面では、竹島の韓国帰属を強く主張する熱烈な民族主義者でもあり、また、朝鮮半島やアジア地域における米軍駐留に非常に批判的であった。このような民族主義的情熱が金氏を学問研究の領域に長く留めておくことができなかったのであろうか、やがて韓国政界に進出する道を選んだ。60年の「4・19革命」の後、李承晩独裁政権崩壊後初の総選挙に無所属で立候補して落選。61年朴正熙軍事クーデターの後、金氏は日本に戻り東大大学院を修了し、一旦帰国した後、ケンブリッジ大学に留学。67年与党の民主共和党から立候補して国会議員に当選した。69年「北朝鮮スパイ団」の首謀者の一人とされて、東大大学院出身の国際法学者朴燾洙氏と共に、KCIAに逮捕され、第一審、第二審とも死刑判決

を受け、70年韓国大法院で死刑判決が確定した。

金氏の救援活動は、金氏と親しかった関教授及び植田ゼミの学友たちの間から始まり、1970年秋、近畿大学で開かれた国際政治学会研究大会では、出席者のほぼ全員が朴正熙大統領あて助命減刑嘆願書に署名して下さった。70年末までに東京と関西地区で集められた合計約5,500名の助命減刑嘆願書署名簿が、朴大統領その他韓国政府当局者に送られた。

KCIAが発表した金氏のスパイ容疑事実なるものは、金氏自身はこれを全面的に否定しており、韓国国会議員137名（国会副議長、与党議員を含む超党派）が朴大統領あて金氏の助命嘆願書を提出していることから判断しても、金氏がスパイであったとは到底考えられない（スパイに対して国会議員が助命嘆願運動を行うことは、韓国ではありえないからである）。金氏逮捕の真相は、まだ不明の部分もあるが、各種の情報から推測すると、当時の朴大統領と金鍾泌氏との朴大統領三選・改憲をめぐる対立とからんで、金鍾泌氏に近かった金圭南氏をスパイに仕立て上げた政治的事件であるとする見方が成り立つ。

1972年7月南北平和統一に関する原則が合意され、南北共同声明が発表された直後、金氏の死刑が執行された。約2年間にわたる金氏助命運動は、所期の目的を達せられずに終わった。しかし、国際政治学会の多数の会員各位が、金氏救援活動に温かい協力と援助を惜しまれなかったことに対して、私は金氏の学友の一人として、今も深く感謝している。

昨年秋の朴大統領射殺事件を転機とする朴「維新体制」下の強権政治の崩壊から民主化への胎動の開始は、朝鮮半島の政情と国際関係に、徐々にではあるが明るい展望をもたらしつつあるかに見える。金大中氏らの公民権回復に伴い、南北朝鮮の平和的民主的統一への歩みは、なお幾多の曲折が予想されるとはいえ、着実に大きな潮流となって行くであろう。金圭南氏が希求してやまなかった南北朝鮮再統一の悲願が、その血債の上に、実現する日の近からんことを心から期待したい。

## 研究分科会の近況

### トランス・ナショナル部会

馬場 伸也 (津田塾大学)

数年前、非国家的行為体が国際関係に及ぼす影響に興味をおぼえて発足した国際社会学会研究会は、その後、本学会の「トランス・ナショナル部会」と合同して、着実な発展をつづけてきました。そこでその研究成果の一部として、3月下旬、『非国家的行為主体のトランスナショナルな活動とその相互行為の分析による国際社会学』と題する報告書を刊行しました。

今後も、2ヶ月に1度の割合で定期的に研究会をつづけていく予定でおりますので、参加・発表等の御希望がございましたら、事務局宛御連絡下さい。以下は昨年末より本年度前半期にかけての定期研究の活動状況並びに計画であります。

1979年

12月8日 加藤俊作氏 (関東学院大学)  
「軍縮とNGO」

1980年

1月26日 野林 健氏 (同志社大学)  
「貿易依存と対外行動」

3月15日 杉江栄一氏 (中京大学)  
「軍縮と世論の形成」

4月 小倉充夫氏 (津田塾大学)  
「開発社会学の動向」

6月 馬場伸也氏 (津田塾大学)  
「アイデンティティの国際政治学」

9月 大島英樹氏 (早稲田大学)  
「現代国際社会における国家の地位と機能についての一考察」

連絡先 〒187 小平市津田町1491 津田塾大学 馬場  
伸也研究室内 分田順子(0423-41-2441)

### 計量政治部会

山本 吉宣 (埼玉大学)

本分科会は、計量国際政治学に興味を持たれている会員を中心として、春と秋の学会例会を機に会合を持ってきた。そこでは、計量国際政治学の現状についての情報交換、あるいは会員の研究の中間発表などが行われた。

また、昨年末から、メンバーの間のより機能的な情報交換をめざして、2・3ヶ月に1回の割合で分科会を開くことにした。第1回は、昨年12月に行われ、大芝亮会員 (一橋大学) が、現在研究中である「国連の予算過程」を発表された。日本においては初めての試みであ

り、将来の成果が待たれるものであった。第2回は、今年の4月3日に、山本吉宣が、「同盟形成の数理モデル」を発表する予定である。

### アフリカ・中近東部会

浦野 起 央 (日本大学)

来る5月25日、神戸学院大学研究大会の第2日の午後、アフリカに関する二つの報告を予定しています。一つは、東アフリカの国家形式をとりあげたもので、報告者は森川純 (東海大院生) です。いま一つは、アフリカ地域統合のケース・スタディとして東アフリカ共同体の形成と解体に焦点をあてたもので、報告者は菅野亮子 (大東文化大学講師) です。ローデシア問題の解決など、南部アフリカをめぐる研究会の開催も準備中です。報告の希望、プログラムの作成、開催の都合など、自宅 (〒145 大田区田園調布1-18-12 浦野) あて、お知らせ下されば幸いです。

### 平和研究部会

高柳 先 男 (中央大学)

はなはだ遺憾なことです。平和研究分科会のこれまでの活動は、かならずしも積極的なものであったとはいえません。学会開催時に分科会をもって、外国での平和研究関係の大会に出席された会員にその様子を報告していただいたり、分科会としての活動方針を話しあったりしたほかには、78年6月にA・ラパポート教授をお迎えして研究会を開催したこと、また79年5月に刊行された『戦後日本の国際政治学』の平和研究部門の担当にあたって共同作業を行なったことなどが、主だった活動ということになります。こうした分科会としての活動の停滞ぶりをなんとか打開して、今後は積極的、計画的に研究活動にとりこんでいきたいと考えております。

そのためにさしあたり実行したいと考えていることをお知らせします。まず第一に研究会の定例化です。これは会員の研究報告や情報交換の場ですから、早急に実現したいと思います。4月下旬に、「日本の平和研究の課題」をテーマにして研究会をもつべく、目下準備中です。第二に定例研究会が軌道にのった段階で、そこでの成果を広く学会の研究会にて発表すべく企画委員会と連携していきたいと考えております。第三に編集委員会との連携のもとに、研究成果を学会機関誌に反映させていきたいと考えております。この点、現在、初瀬龍平編集委員の企画内容に関連した研究会を、当分科会の活動の一環としてもつことが計画されております。

平和研究に関心をもたれる学会員のみなさんのご協力を切にお願いするしだいです。

## 学会誌編集委員会だより

川 田 侃(上智大学)

去る2月の運営委員会において、編集委員会のなかに編集副主任の制度と書評小委員会を新たに設けることが決まりました。編集副主任は、編集委員会の事務上の窓口として、また連絡役として機能します。早速2月から石川一雄(国立音楽大)が編集副主任を引き受けることになり、既に石川は編集主任の下で仕事を始めています。

<機関誌の編集状況について> 現在、機関誌第64号『国際開発論』(編集責任:森利一)の編集が終り、印刷所に入っています。春の学会で配布の予定です。第65号『社会主義とナショナリズム』(編集責任:中西治)および第66号『東アジアと日本—その史的考察—』(編集責任:臼井勝美・藤井昇三)もそれぞれ8月と10月に刊行の予定です。

1981年以降は、81年度分として第67号『相互依存システムと国際理論』(編集責任:臼井久和)、第68号『日豪関係』(編集責任:渡辺昭夫)、第69号『日本外交のロビースト』(編集責任:西原正)、の3冊、82年度分として第70号『国際関係思想の展開』(編集責任:初瀬龍平)、第71号『日米関係』(編集責任:有賀貞)の2冊、計5冊分の刊行が予定されています(いずれも仮題)。引き続き、81年度分の第3冊目、および82年度分の3冊分もしくは4冊分についての編集方針を検討中です。82年度以降は年間4冊を刊行したいというのが運営委員会の意向であり、会計上の問題と併せて検討中です。

<書評小委員会新設について> 前述のように、このたび書評小委員会の設置が決まりました。学会誌の書評部門の拡充を目的として、企画、原稿募集、執筆依頼、原稿審査等をその任務とします。現在、編集副主任の石川一雄が世話人となって組織化にかかっていますが、既に、小沼新(宮崎大学)、猪口邦子(上智大学)、黒川修司(横浜市大)、波多野勝(慶応大大学院)の各会員の参加が決まっています。

書評部門は、本来学会誌の柱の一つ。今後はできるだけ多くの会員に参加して頂き、紹介と批評を通じて、新鮮な問題提起と議論の場にしたいと考えています。会員の皆様のご協力をお願い致します。

### ◇関連学会のお知らせ

国際経済学会 6月14日 上智大学(関東支部大会)

国際法学会 5月18日 甲南大学

アジア政経学会 関東部会 5月31日 国際商科大学  
関西部会(未定)

日本平和学会 4月27日 国際文化会館

去る3月22日成蹊大学でおこなわれた東アジア国際政治史部会で、部会活動の一環として中華民国史研究グループの結成が承認された。

中華人民共和国の成立にいたる20世紀中国の歴史は、従来「中国革命史」、「新民主主義革命史」などの名称の下に、主として中国共産党の運動を扱ってきた。そこでは、中国国民党、軍閥などのその他の政治勢力の分析が欠如していた。民国史の研究は、1911—1949年の間にあらわれた多様な政治勢力を分析することによって、従来の中国革命史を再構築しようとするものである。したがって、それは中国共産党史の研究を排除するものではない。

本研究グループは、(一)日本、中国、台湾、アメリカにおける民国史研究の成果を検討すること、(二)その作業の一環として定期的に書評をおこなうこと、(三)民国史自体の研究をおこなうことを当面の課題としている。

本研究グループの発起人は、藤井昇三(電気通信大学)、姫田光義(中央大学)の両氏と私である。当面事務局を、港区三田2-15-45、慶応義塾大学法学部、山田辰雄研究室に置いている。会員諸氏の参加を希望します。(山田辰雄)

### ◇機関誌第67号『相互浸透システムと国際理論』(仮題)の原稿募集について

機関誌第67号は、第50号『国際政治学のアプローチ』以来、包括的に国際政治理論に光をあてたものがありませんので、『相互浸透システムと国際理論』と題して、相互依存の強まった現代国際社会に理論的に分析を加えると同時に、国際政治の新しいパラダイムの模索を試みたいと考えております。

この特集にあたり、テーマと関連した論文を二篇公募致します。奮って御投稿をお願い致します。論文は、400字詰原稿用紙50枚以内(註を含む)。締切は、1980年10月末日必着です。掲載については、編集委員会が投稿者の属する分科会の代表を加えて協議の上決定致します。この結果は、1981年1月末までに投稿者に通知したいと考えております。公募論文に関して疑問のある方は、編集責任者に連絡いただければ幸いです。なお本号は、1981年の春季学会の折に配布される予定です。

(投稿先 〒102 千代田区紀尾井7 上智大学国際関係研究所 川田研究室 日本国際政治学会編集委員会)

国際関係学院訪問記

岡 部 達 味 (東京都立大学)

国際関係学院は北京の西郊頤和園の近くにある。頤和園やその更に西にある香山などへ休日のドライブに行く時、脇道の入口に国際関係学院がその道の先にあることを示す看板があるのを眼にして、北京滞在中に一度あそこを訪問しなければいけないと思いつづけていた。北京には、このほかに北京大学の国際政治系、社会科学学院の世界政治研究所、独立の研究機関だが外交部との関係が深い国際問題研究所等、国際政治の研究教育機関がある。これらの機関は私は既に訪問していたが、帰国が迫る三月になっても、国際関係学院だけはまだ訪問できずにいた。

中国で、こういう機関を訪問することはそれ程簡単ではない。私のように日本大使館に籍を置いている者(特別研究員)は、外交部の礼賓司その他しかるべきルートを通じて申請しなければならない。私が礼賓司へ国際関係学院訪問を申請したのは昨年末のことだった。何度か催促のやりとりがあった末、ようやく3月15日の朝9時に訪問が実現した。

当日、陳毅元外相の筆になる「国際関係学院」という看板のかかった門をくぐった私は、教務処の呉永瑞氏、日語系の于長江教授らに迎えられ、二階の応接室でこの学校の歴史や現状についてのお話をうかがった。それによると、この国際関係学院も、御他聞にもれず、文革中ずっと閉鎖され、大学の本部は河北省に移っており、教授陣も各地の大学その他に散り散りになっていた由である。頤和園近くの現在のキャンパスも、他の機関に占拠されていた。この学校が再開されたのは、他の大学よりずっとおそく昨年になってからであった。現在再建はじまっただけで、学生も昨年からやっと1年生200人を入学させ、いまはまだもっぱら外国語だけを教育している段階であった。現在いる学生は、英、日、仏語の専攻だけだが、かつてはこのほかに独、露、西も教えていたという。

3年生になると国際状況とか国際関係とかいう科目を教えるはじめるそうだが、現在はまだ関係の教授陣は2人だけで、教員も募集中という話であった。窓から外をみると新しい建物を建築中で、キャンパス内の旧学生宿舎には、他の機関につとめる人がまだ住んでいるという。呉氏らの説明の通り、再建がその緒についたばかりという状況である。10年の文革は科学技術関係だけでなく、このような渉外関係の幹部養成機関にも大きな傷あとを残しているのだ。

概況説明をうかがったあと、大連生まれで一高、東大(法)出身の于教授が、日本人と全くかかわらないなめらかな日本語で、日本の大学の現況などを質問してきた。矢継ぎ早の質問にたじたじとなりながら、私はいま門戸を開いて外国の事情を貪欲に吸収しようとしている中国の同業者たちの熱意を肌で感じたのであった。

新 著 余 滴

『相互依存の国際政治学』(共編) (有信堂)

鴨 武 彦

こんにちの世界政治にあって、一つの見落すことのできない大きな力学上の特色は、国家社会間のさまざまなレベルにおける交流の密度の高まりではなからうか。国ぐいの間での貿易や金融、海外投資、テクノロジー、そして人間や思想、情報などのいちじるしい交流の増大がすなわちそれである。この新たな潮流は、ひろく「相互依存」現象として概念づけられてきた。

じっさい、「相互依存」という概念は、近年の先進工業諸国間の共同声明や外交文書によくみられるようになった。また、その概念は、開発途上諸国の国際会議においても採択されるようになった。では、「相互依存」とはいったい何を意味するものなのだろうか。その政治力学的なインプリケーションの発見の作業が国際政治学を研究するものにとって緊急の課題となつてはいないか。こうした考えのもとに、われわれは本書の執筆にとりくんでみた。

山本吉宣氏(埼玉大)と私が編者になり、まず『なぜ「相互依存」の世界なのか』といった総論的なテーマを担当した。そして「相互依存」の事例分析について、勉強チームの丸山直起氏(小樽商大)が中東を、山本武彦氏(国会図書館)が東西ヨーロッパを、佐藤幸男氏(武蔵工大)がラテン・アメリカ、多賀秀敏氏(早大大学院)がアフリカのケースをそれぞれ執筆した。「相互依存」を規範概念としてではなく、あくまでも分析概念としてとりあげ、その各地域サブシステムにおける不均質的發展状況の実体といったものを描きだそうと試みたわけである。

「相互依存」は実に多面的な力学の特性をもっている。共著での概論的体系性をつくりだすことは本当に困難であった。それぞれの研究の意欲のみが先行した感がある。今後は、東南アジアの事例をふくめ、「相互依存」の多層レベルにおける跋行的発展について、これらをより深く分析していきたいと思う。本書については、なによりもまず、学会の皆様の御批判を、そして厳しい御叱正をおおがなければならない。

# 1980年度春季研究大会のお知らせ

日 時：5月24日（土）、25日（日）

会 場：神戸学院大学

神戸市垂水区伊川谷町有瀬

電話（078）974-1551（代表）

共通テーマ：80年代の国際政治

開 場：午前9時30分

## 第1日（5月24日）

「日本外交史」部会（午前10時～午後0時15分）

無条件降伏論 広島大学助教授 五百旗頭 真  
戦前日本の国際秩序論にみる内発的創造性とそ  
の限界

上智大学教授 三輪 公忠

「平和研究」部会（午前10時～午後0時15分）

米国の武器輸出決定過程

—第三世界への輸出について—

武蔵工業大学助教授 志鳥 学修

第三世界における核拡散リスク

学習院大学教授 田中 靖政

「中国」部会（午前10時～午後0時15分）

中華人民共和国成立前夜の国際関係

東京外国語大学国際関係論研究室 井尻 秀憲

現代中国の政治改革（基層レベル）と大衆参加

—人民日報投書欄分析を中心に—

成蹊大学講師 天児 慧

昼 食 （午後0時15分～1時45分）

研究分科会 （1）（午後0時15分～1時45分）

総 会 （午後1時45分～2時45分）

「80年代の国際政治（1）一大国の国際関係」部会

（午後2時45分～5時45分）

## 中 国

中国外交の現段階（1）

—1972年以後の変化と戦略—

成蹊大学教授 宇野 重昭

中国外交の現段階（2）—歴史的展望—

横浜市立大学教授 山 極 晃

## ソ 連

ソ連経済と第三世界政策

日本国際問題研究所研究員 西村 文夫

## アメリカ

80年代の米中関係

東京外国語大学助教授 宇佐美 滋

アメリカの現代世界認識について

—H. A. キッシンジャーと Z. プレジンスキー

をめぐって—

龍谷大学教授 田北 亮介

懇 親 会 （午後5時45分～7時15分）

## 第2日（5月25日）

「80年代の国際政治（2）—第3世界の諸問題」部会

（午前10時～午後0時15分）

経済学からみたエネルギー問題の諸側面

埼玉大学講師 室田 泰弘

ペルシア湾の問題点

中東経済研究所研究副主幹 石田 進

ラテン・アメリカの政治体制

—ポピュリズムから権威主義へ—

神戸市外国語大学助教授 吉森 義紀

昼 食 （午後0時15分～3時）

研究分科会 （2）（午後0時15分～3時）

シンポジウム「世界秩序の構造と展望」

（午後3時～6時）

南北関係と新しい国際秩序

国連大学副学長 武者小路 公秀

開発過程の展開と国際構造の変動

—時間の地球政治学—

東京大学教授 関 寛治

新冷戦と「世界秩序」

東京工業大学教授 永井 陽之助

多極化世界の構造 上智大学教授 川田 侃

司 会

一橋大学教授 細谷 千博

## 資料センターめぐり

### 北海道大学スラブ研究センター

木村 汎 (政治部門担当教授)

スラブ研究センターは、創設以来ほぼ20数年を経過した、わが国における国立大学付属の唯一のソ連・東欧の地域研究機関である。国内では、「スラ研」として知られている。

政治、国際関係、歴史、経済、文学など7名の教授定員のほか、1名の日本人客員教授、2名の外国人客員教授、1名の情報資料担当の助教授のポストをもつ。北海道大学の学内共同利用施設として、約30名にのぼる助手以上の教官を、兼任研究室員に委嘱するほか、研究プロジェクト毎に、学外の研究員や研究担当者も10数名委嘱している。

現在力を入れている共同研究プロジェクトは、「日ソ関係の総合的研究」で、現在第3年目に入っており、「シベリア開発と日ソ漁業」、「北方領土」、「ロシア国民性」の3セクションに分れて共同研究を行っている。

1979年度における3回のシンポジウムの要約が出版されている。主な機関誌は、『スラブ研究』(年2回)で、最近は、欧文の論稿も多く、海外においても高く評価されは始めている。センターの組織、活動を記した『便覧』(日・英文)のほか、『ニューズレター』(年3-4回刊)も出している。とくにわが国における『ソ連・東欧研究文献目録』も、スラブ研究者に好評の出版物のひとつである。

同センターの図書資料は、過去20年間、年間約1,000冊の割合という遅々たる増大ぶりであったが、最近2-3年、関係各位の努力により、予算が急増し、整理が追いつかないほどである。ヴェルナッキー、スパーリン・コレクションなど、世界の学者の羨望を尻目に、購入したものもある。また、スラブ関係を扱った米国のPh.D.論文、約1,200点が最近入荷したところである。約150種を越える雑誌・新聞等の定期刊行物の蒐集には、一貫して力を入れており、わが国において、同センターのみが購入先となっているものも多い。情報資料担当の助教授のポストを文部省が昨年認可したことは、本センターを日本におけるスラブ学術資料の拠点にしようとする意図と解される。

## 会員による新著

(昭和54年12月まで、未完)

A. S. リンク (菅英輝・松延慶二訳)『地球時代の先駆者—外政家ウィルソン』、玉川大学出版部、1979年7月  
奥村房夫『現代防衛戦略—比較防衛論』学陽書房、1979年11月

笹部益弘『集团的安全保障とその構造』教育社、1979年10月

R・ローズ (犬童一男訳)『現代イギリスの政治』II、岩波書店、1979年9月

寺谷弘王『八〇年代ソ連の世界戦略』教育社、1979年10月

西川潤『八十年代、予兆と底流—国際関係を見る眼(1)』ダイヤモンド社、1979年11月

西川潤『崩壊する「支配と従属」—国際関係を見る眼(2)』ダイヤモンド社、1979年12月

山田浩『核抑止戦略の歴史と理論』法律文化社、1979年11月

藤原保信『政治哲学の復権—新しい規範理論を求めて』新評論、1979年11月

山口定『ファシズム—その比較研究のために』有斐閣、1979年11月

山上正太郎『第二次世界大戦—戦時外交と指導者』教育社、1979年11月

訂正 前号2ページの研究分科会近況欄(日本外交史部会)の島田宏は島岡宏の誤りです。慎しんで訂正致します。

## 編集後記

花吹雪の中で第11号の編集が終わりました。紙面は雑多な情報がいつもの如く並べられ、相変らずのスタイルです。でも、予定原稿が入稿できずに少々慌ててピンチヒッターをたてたり、予期せぬホットな情報が飛び込んで喜んだり、こんなささやかな小会報の編集にも、チョットしたドラマがあります。そんなドラマの機微を少しでも紙面にいせたら、無味乾燥な内容にならずに済みそうです。

(H. Y.)

昭和55年4月20日 発行

日本国際政治学会

ニューズ・レター委員会

〒108 東京都港区三田2-15-45

慶應義塾大学法学部松本三郎研究室内

発行人 細谷千博

編集人 松本三郎

印刷所 梅沢印刷所